

# 言語行為から見たラポールマネジメント： 「遠慮」という言語行為

久 保 進

## 1. 目 的

ラポールマネジメントあるいは信頼関係マネジメントという用語が言語学に登場したのは、Spencer-Oatey (2000) に始まるといってよい。本稿では、これまであまり取り扱われることのなかった、「遠慮」という典型的な日本人の発話行為を観察することによって、現代行為理論の枠組みから派生する問題点を明らかにし、その上で、ラポールマネジメントという観点から現代言語行為論をより豊かな理論的枠組みにするための手立てを提案することにある。

## 2. 社会的背景

### 2. 1 「わきまえ」

井出 (1992) は、「日本語の尊敬語が目上の人に対して使われた場合、その敬語行動は、目上の人にそれを使わなければならないという社会的に規定されたルールに従う「わきまえを示す敬語行動」である。」と規定している。

これを、言語行為論の枠組みでは、話し手は、(i)を予備条件として、そして、(ii)をその論理的帰結として、さらに、(iii)を発語媒介効果として敬語の言語行為を遂行する、と捉えなおすことができる。

- (i) 自身の「分をわきまえる」ことが、社会的暗黙のルールとして尊重しなければならない [予備条件],

- (ii) 従って、それを「わきまえない」ことは適切ではない〔予備条件からの帰結〕、
- (iii) 「わきまえない」者は、マイナスの社会的評価を受ける〔発語媒介効果〕。

## 2. 2 「横の人間関係」

### 2. 2. 1 縦のみならず横の人間関係がある

一般に、人間関係のうち、その上下関係はタテの関係と呼ばれ、「ウチ・ソト・ヨソ」の関係は横の関係と呼ばれる (cf. 中根, 1967)。従来、社会言語学 (cf. 井出, 1992) では、「ウチ・ヨソ」関係を親疎の関係と捉えている。本稿では、「ヨソ」を「ヨソサマ」と「ヨソモノ」に下位分類する考え方を取り、「遠慮」分析を行う。

### 2. 2. 2 ヨソ様, 世間様

多くの観察が示唆するように、中高年期の横の人間関係と青年期のそれは大きく様変わりをしてしまっているようである<sup>1)</sup>。例えば、豊明市立沓掛中学校発行の「校長室の窓」(平成14年10月1日第32号)には「ヨソ様復活」と題して(1)のような「世間」についての所見がある。ここには、かつて横の人間関係の主要素であった「ヨソサマ」が消失してしまっていて、今は「ミウチ」と「ヨソモノ」による二項対立的人間関係になっているという指摘がある<sup>2)</sup>。

1) この想定の実偽のほどは大規模な言語実態調査の結果を待たねばならない。

2) 同様の観察は、本庄南ロータリークラブの「会報」(平成14年5月28日発行)に掲載の米山和仁本庄警察生活安全課長の談話のまとめにもある。

少年非行防止 世間体、はじめに注目した人間関係の概念、身内とヨソ様、大切な人＝ヨソ様、関係ない人＝ヨソ者、現在の少年にはヨソ様に当たる人がいない。仲間＝身内 その他すべて＝ヨソ者 すなわち、先生、近所の人等はヨソ者で、関係ないと思っ込んでいます。したがって、ヨソ者に注意されるとすぐ切れる。一番の理由は話を聞く親がいないということ。

- (1) 「昔はこどもを，身内・ヨソ様・ヨソ者が三重に取り巻いていた。今は身内・ヨソ者の二重の取り巻きに変わってしまった。」と嘆く声を聞いた覚えがあります。こども達が，身内の周りにいる近隣の人たちを意識できなくなったことが，平気で恥ずかしい行いをする一因と思われます。「世間様（ヨソ様）に顔向けできない。世間様に恥ずかしい。」なんてやりとりを聞くことは珍しくなりました。

地域の教育力の復活が叫ばれて久しいのですが，その前提は，地域の人間関係づくりであり，言葉を換えれば，こどもと地域の大人たちとが顔馴染みになることだと思います。（以下，略）

かつては、「世間」を意識するコトバ，大切に思っているコトバとして，逆説的ではあるが，「旅の恥はかき捨て」というコトバがしっかりと生きていた。この言葉は，「隣近所，すなわち，世間様の前では恥ずかしいことは出来ない。そんなことをすれば，「世間体が悪い」。しかし，旅先では，誰も自分のことは知らないのだからどのような恥ずかしい行為をしたとしても，世間に知られるのではないからかまわない。」ということの意味する。つまり，旅先での人間関係はお互いにヨソモノ同士を意味し，その間では「遠慮も何も在るものか，好き勝手をやればよい」という捉え方である。「世間体が悪いことはできない。そんなことをしたら恥ずかしくて人前を歩けない」は「恥」や「慎み」という概念に繋がる。授業中や授業参観中におしゃべりに夢中になる学生やその父兄などは，もはや旅先で羽目を外す旅人と同様に，おしゃべり相手以外の人々をヨソモノ扱いにしている。彼らには，「場へのわかまえ」や「慎み」というものが希薄になってきている。彼らは注意されても，数分後にはまたおしゃべりをはじめ。すなわち，彼らにとって恥は常にかき捨てなのである。いや，すでに「恥」そのものの概念を喪失しかけているのかもしれない。つまり，これらの観察は，かつて日本における横の人間関係においては，ヨソの概念がヨソサマとヨソモノに区別されていたが，現在の青年層の人間関係においては，

その区別が希薄になりつつあることを示唆している。筆者が、最近おこなった「遠慮」についての調査もこのような観察を支持する結果が得られた。

この調査は、(2a) に示すような所与の言語コミュニケーションの文脈に回答者自身が置かれた場合、(2b) の選択肢から、どれを選択するかを訊ねたものである。それぞれの選択肢は、(1)が「相手への遠慮の気持ちの表明と身内への配慮」、(2)が「相手への感謝の気持ちの表明と相手の好意に対する評価の言葉の表明」、(3)が「相手への感謝の気持ちの表明と相手への配慮」、(4)が「相手の申し出に対する躊躇」、そして、(5)が「相手に対する配慮のない(相手の体面を傷つける)断りの表明」を代表している。

(2) a. 文 脈

両親にたのまれてあなたは近所の顔見知りのお宅に、お届け物をした。そのお宅から帰ろうとしたとき、その小母さんが、「お使いをしてくれるなんて、今どきめずらしいわ。これもらい物だけど、あなたに似合いそうだからあげるわ」と新品のセーターをあなたに手渡そうとする。その時、あなたはどうか答えますか。

b. 選択肢

- 1) とんでもない、結構です。親にしかられます。
- 2) ありがとうございます。いただきます。好きな色です。
- 3) ありがとうございます。お気遣い感謝します。
- 4) もらっていいのですか。どうしよう。
- 5) いりません。頂く理由がありません。

## c.

選択肢	男子学生		女子学生		全体	
	回答数	百分率	回答数	百分率	回答数	百分率
1)	16	10.9	18	23.1	34	15.2
2)	30	20.5	24	30.8	54	24.1
3)	58	39.7	12	15.4	70	31.3
4)	33	22.6	23	29.5	56	25.0
5)	9	6.2	1	1.3	10	4.5
合 計	146		78		224	

この調査の結果からは、おおよそ次のようなことが、観察される。(i)男子学生(146名)と女子学生(78名)では、この文脈における回答の傾向が大きく異なる。男子学生は、その4割近くが、選択肢(3)の「相手への感謝とともに相手への配慮」をしめす言葉を選択しているが、女子学生は、この選択は約15%と男子学生の4割にも満たない。(ii)女子学生は、その6割近くが、選択肢(2)「相手への感謝ともらう品物への評価」と選択肢(4)「相手の申し出に対する躊躇」をほぼ3割ずつ均等に選択している。男子学生は、両方の選択を合わせて4割強となる。(iii)男子学生が1割、女子学生が2割と、他の選択肢からみると少ないが、「相手の申し出に対する遠慮」が選択されている。また、女子学生の2割という数字は男子学生の、選択肢(2)や選択肢(4)の数字を上回るものである。これらの観察、特に(i)と(iii)の結果は、青年層の言語使用において、割合は少なくなっているが、まだ、「遠慮」や「相手への配慮」が生きていることを示している。

そこで、本稿では、これらの観察から、「現代社会では希薄になりつつあるといえども、ヨソにはヨソサマとヨソモノの区別が在る。」という前提で、横の人間関係を以下の3種から構成されるものと仮定する。

- (i) ミウチ：家族、他の組織に対峙する組織の構成員（わが社＝ウチ、ウチの組、etc.）

- (ii) ヨソサマ：世間様，隣近所，行きつけの店，面識のある他人＝世間体を  
気にする関係
- (iii) ヨソモノ：面識の無い他人

これらの，横の人間関係とのかかわりで遠慮という言葉行為を定義すると次のようになる。

- (i) ミウチ：遠慮しないことが**義務的である**関係（ホンネで付き合える関係）
- (ii) ヨソサマ：遠慮が**義務的である**関係（タテマエとホンネの**使い分けが**  
**求められる**関係）
- (iii) ヨソモノ：遠慮が**存在しない**関係（**対人的配慮の埒外**の関係）

## 2. 3 作業仮説

横の人間関係は，それぞれの人間関係にある対話参与者間に，「遠慮」行為が，そもそも問題になるか（関わるか，存在するか），もし問題になるとするとすれば，その遂行が義務的か，それとも，遂行しないことが義務的という点から定義できるのではないかと想定できる。そこで，本稿では3つの作業仮説を提案することとする。

### 2. 3. 1 ミウチ関係

ミウチ関係にある対話参与者間では，「**身内の間で遠慮するなんて水臭い**」の言葉に代表されるように，お互いに遠慮しないことが期待されている。その期待を裏切ることは，不適切で，相手を「**ヨソサマ**」扱いすることになり，「**他人行儀な**」という印象を相手に与えることになる。そこで，ミウチ関係は作業仮説1 (i)のように定義する。ちなみに，(ii)は(i)が破られた場合の遠慮の発話が持つ発語媒介効果である。この発語媒介効果は，遠慮の発語内行為の遂行に際して，多くの場合，発話者が意図していないものであり，発話者にとって

不本意な結果ということになる。

### 作業仮説 1

ミウチ関係にある対話参与者間では、

- (i) 遠慮しないことが義務的である、
- (ii) (1)を遵守しないことは不適切で、「他人行儀な」という印象を相手に与えることになる。(発語媒介効果)

従って、ミウチ関係にある者にたいして、「遠慮をもとめること」は作業仮説 1 に反し、対話相手を他人扱いすることになり不適切である。

そのことは、相手の申し出を「断る」の意の「遠慮する」ではなく、その転義である「座を外す」の意味の「遠慮する」の場合も同様である。一般に、談話者の集まりから特定の談話者を除いて、他の者に「座を外させる」という言語行為の遂行は、「その談話においてこれから話される内容がその特定の談話者以外の者に聞かれてはならないものである」ということを意味する。このことは同時に、その発話の遂行によって、当初の談話者の集合が、「座に残るもの」と「座から外れるもの」の2つに分けられることを意味する。次の例を、参照されたい。

- (3) 「長子ッ。今日はお父さんとお母さんが遠山さんにお話があるから来ていただいたの。あんたは遠慮しなさい。」  
「遠山さんは私のお友達よ。話って、どうせ私のことでしょ。だったら、本人の私が聞きちゃいけないって法はないでしょう」  
「ああ、いたけりゃいい」大吉がムスツとして言う。

[橋田 1 : 267-268]

この引用部の登場人物の一人、長子は、自分よりかなり年上で先妻との間に大

きな子供のいる遠山と付き合っている。長子の両親はそのことが気に入らず、家に挨拶にきた遠山に長子との付き合いを止めてくれるように言い渡そうとしている。そのことは、娘が同席していたのでは言いにくいこともあり不都合なので、彼らは娘に座を外すよう求めている。「ミウチの関係にある者に座を外させるということは、その者を仲間はずれにすること」である。言わば、ミウチの関係から「引きずりおろす」ことである。この場合、長子は両親との間と、遠山との間でそれぞれ、別々のミウチの関係にあるわけであるから、二重のミウチ関係にあるわけで、「座を外させられる」ことにより、そのどちらの関係も認められないことになり、極めて不愉快な気持ちに陥るのである。これも、「遠慮させる」行為の持つ発語媒介効果の1つである。

### 2. 3. 2 ヨソサマ関係

ヨソサマ関係にある対話参与者間では、「(そんなことでは)世間様(ヨソ様)に顔向けできない。」の言葉に代表されるように、ヨソサマに当たる相手に対して遠慮することが期待されている。その期待を裏切るとは、不適切で、相手に「ミウチ扱い」を求めているようで「厚かましい」という印象を相手に与えることになる。そこで、ヨソサマ関係は作業仮説2 (i) のように定義する。ちなみに、(ii) は (i) が破られた場合の発話を持つ発語媒介効果である。この発語媒介効果は、その発語内行為の遂行に際して、多くの場合、発話者が意図していないものであり、発話者にとって不本意な結果である。

#### 作業仮説2

ヨソサマ関係にある対話参与者間では、

(i) 遠慮するのが義務的である。

(ii) (i)を遵守しないことは不適切で、「厚かましい」という印象を相手に与える。(発語媒介効果)

従って、ヨソサマ関係にある者同士で、遠慮すべき場面で、遠慮することを忘れていた相手に対しては、「少しは遠慮しろ」とか「少しは遠慮ということを考えろ」といった相手に遠慮を促す発話や「少しも遠慮しない」とか「遠慮ということを知らないのか」といったマイナス評価を表す発話が遂行される。

### 2. 3. 3 ヨソモノ関係

ヨソモノ関係にある対話参与者間では、「ヨソモノの甘言にのるな。」の言葉に代表されるように、ヨソモノに当たる相手からの申し出や誘いにはのらないことが期待されている。その期待を裏切ることは、不適切で、相手に「甘く見られる」とか相手を「つけ上がらせる」という発語媒介効果を持つ。ミウチに不利益や危険をもたらす可能性をはらむことになる。そこで、ヨソモノ関係は作業仮説3 (i)のように定義する。ちなみに、(ii)は(i)が破られた場合の発話を持つ発語媒介効果である。この発語媒介効果は、その発語内行為の遂行に際して、多くの場合、発話者が意図していないものであり、発話者にとって不本意な結果である。

#### 作業仮説3

ヨソモノ関係にある対話参与者間では、

- (i) 断固断ることが義務的である。
- (ii) (i)を遵守しないことは不適切で、相手に困惑の気持ちを抱かせることになる。(意図しない発語媒介効果)

## 3. 「遠慮」の言語行為

### 3. 1 「遠慮」の必要十分条件

現代言語行為論 (Vanderveken, 1990; 1994; 1999; Vanderveken and Kubo, 2002) の枠組みでは、対話における「遠慮」の言語行為は、(4)に見るような、

先行の言語行為に対する返答の行為として遂行される、(5)のような必要十分条件を満足する行為であると解釈される。

(4) 遠慮に先行する言語行為

(申し出者が相手を喜ばせようと【発語内目的】、相手にとって分に過ぎた申し出であることを承知のうえで【予備条件】遂行する)申し出

(5) 遠慮の発語行為の必要十分条件

発話者は、先行発話の

- (i) 申し出の主と自分がヨソサマ関係にあり【必要十分条件 1：達成の様式】、
- (ii) その発話の内容(すなわち、遠慮の対象)が自身の分に過ぎるものであり【必要十分条件 2：命題内容条件】、
- (iii) かつ、その申し出を即座に受けることは社会的ルールを破ることになるので、**何度かは辞退**することを求められていると承知している【必要十分条件 3：予備条件】ので、
- (iv) それらを**配慮**して【必要十分条件 4：誠実条件】、
- (v) **そこまでしてもらっては申し訳ないという相手に対する配慮**が相手に伝わることを意図して【必要十分条件 5：達成の様式】、
- (vi) かつ、時には、辞退に対しては、繰り返しさらなる申し出があることを期待して【必要十分条件 6：達成の様式】  
**断りを言うこと**である<sup>3)</sup>

3) 現代言語行為論では、3. 1(5)(v)に示すように、多くの発語内行為の発語媒介効果は、達成の様式の構成要素の1つとして取り扱われている。例えば、「遠慮」の発語内行為は、その遂行によって同時に(申し出の)「相手に配慮する」という発語媒介行為の遂行を示唆していることになる。この配慮という行為は一般に相手への歩み寄りの行為であり、肯定的発語媒介効果を狙った発語媒介行為である。時には、この配慮の行為は消極的ポライトネスのストラテジーに対応する歩み寄り行為も含まれる。(多くの場合、相手の申し出が気に入らないという理由で受け入れないのではないから)相手の顔・面子を潰すことが目的ではないという気持ちも伝わることを願っているという発語媒介効果を狙った発語媒介行為である (cf. Brown & Levinson. 1978, 1987)。

尚、必要十分条件2は、遠慮の対象が必ずしも、遠慮の主にとって好ましいものとは言っていない、「有難迷惑」なものも含まれる。

### 3. 2 「遠慮」の必要十分条件の実際

ここでは、対話において、「遠慮」の言語行為の必要十分条件がどのように実現されているか見てみよう。

引用部の対話の登場人物は、互いに家族ぐるみのつきあいで気心の知れた間柄にある。その意味では、彼らは互いにヨソサマの関係にあると言えよう。この場面では親子の訪問客が、暇乞いをする段になって、その家（磯野家）の主人、波平が泊まっていくように勧めている。その申し出は、親子にとって「願ったりかなったり」であるが、その申し出を即座に受けることは礼儀に反する。客は、そこで、その申し出を受けたいのはヤマヤマではあるが、遠慮の詞を何度も繰り返している。この遠慮により「親しき仲にも礼儀あり」という人間関係の約束が果たされているのである。実は、最後のコマでは、本人は泊まっていくようにと言われるのを期待して来ていて、ちゃんと洗面具の用意までしてきているという落ちがついている。

(6) [波平： 家の主人 舟： 波平の妻]

波平：とまっていらっしゃい！

客：とんでもない!! おいとまします

波平：夏休みじゃありませんか

舟：まあ そういわないで

客：いやぁそんなつもりじゃなかったんで [Hasegawa 5 : 13]

「遠慮」の発話「とんでもない!! おいとまします」の発話に際して、客は磯野家とはヨソサマの関係にあることを認識している。従って、【必要十分条件1】が満足されている。また、彼は、波平の申し出、すなわち、自分が「遠慮

する」対象が、自分たちにとって分に過ぎる、ありがたいことであるという気持ちでいる。従って、【必要十分条件2】も満足されている。さらに、客は波平や舟からの申し出に、再三辞退している。従って、【必要十分条件3】も満足されている。そして、それらを配慮の上【必要十分条件4】、(期待はしていたが、期待通りの)申し出をしてもらって恐縮しているという気持ちが相手に伝わることを期待している。従って【必要十分条件4, 5】も満足されている。最後に、数度辞退してもそれに応じて繰り返し申し出があることを期待している。従って、【必要十分条件6】も満足されている。

次の例も、同様の観察ができる。引用部の対話の登場人物は、その家の年長の娘サザエとその母親舟を訪ねてきた年配の婦人である。従って、互いにヨソサマの関係にあり、かつ、その娘には、その客に対してアラタマツタ対応が求められる。この場面では、娘は客に床の間を背にする席、すなわち、上座に座るよう勧めている。それに対して、客は、その席は自分には過ぎた席であるとして遠慮し、勧められた座布団を下座に引き寄せようとする。これも社交上の儀礼の1つであり、このあとしばらく、お互いに譲らず、座布団の押し合い引き合いが続く。

(7) A: サザエ, B: 客

A: どうぞ あちらへ

B: マアあんなおたかいところへ

いえ こちらに いただきます

A: どうぞここに

B: いいえ それでは あんまり

[Hasegawa 1, 155-156]

「遠慮」の発話「マアあんなおたかいところへ いえ こちらに いただきます」の発話に際して、客の婦人は波平一家とはヨソサマの関係にあることを認識している。従って、【必要十分条件1】が満足されている。また、彼女は、

サザエの「床の間の前の席にどうぞ」という申し出、すなわち、自分が「遠慮する」対象が、自分にとってあまりに分過ぎたことであるという気持ちである。従って、【必要十分条件2】も満足されている。さらに、婦人はサザエからの申し出に、恐縮しきって再三辞退している。従って、【必要十分条件3】も満足されている。そして、それらを配慮の上【必要十分条件4】(予想だにできなかったような)申し出に恐縮しているという気持ちが相手に伝わることを期待している。従って【必要十分条件4, 5】も満足されている。しかし、先の例と違って、繰り返し辞退したらもうそれ以上の申し出がないことを期待している。従って、【必要十分条件6】も満足されている。

#### 4. 必要十分条件の妥当性の検証

この節では、(5)に示した個々の必要十分条件が、「遠慮」という言語行為を適切に特徴付けているかどうかを検証し、問題点を指摘することを目的とする。

##### 4. 1 必要十分条件1の妥当性

必要十分条件1が成り立つには、作業仮説1, 2, 3が常に成り立つことが求められる。従って、作業仮説1に違反してミウチ関係にあるにもかかわらず「遠慮」を遂行しているように見える事例が1つでもあったり、作業仮説2に違反してヨソサマ関係にあるにもかかわらず「遠慮」が遂行されていないように見える事例が1つでもあったり、作業仮説3に違反してヨソモノ関係にあるにもかかわらず「遠慮」が遂行されているように見える事例が1つでもあると、必要十分条件1に対する反例であるかどうかを検討しなければならない。もし、それらの1つでも反例であることが認められれば、必要十分条件1の妥当性は疑わしくなる。以下では、これら3つのケースを順次検討してゆく。

##### 4. 1. 1 ミウチ関係にある談話参与者間で「遠慮」は遂行されることがあるか？

次例は、本来遠慮の要らないはずのミウチ関係において、「遠慮」が遂行されているかのように見える事例である。

- (8) (カツオがお年玉袋を畳の上にあたかもトランプのカードを並べるように並べているところに、従兄弟のノリスケがやって来た場面)

ノリスケ：なんだ　なんだ　まだトランプなんかしてんのか！

カツオ　：ほうほうからいただいたお年玉のせいりです。

(ノリスケがしてやられたと思いながら、しぶしぶ財布から1,000円札を1枚取り出そうとしているところへ、後ろから、覗き込みながら、)

カツオ　：いいですよ　ムリしなくて。　　[Hasegawa 8 : 40]

ここに登場する、カツオという少年は、小学校の高学年男児で、悪知恵のよく働く、大人びた性格の悪童である。この場面は、年長の従兄ノリスケからまだもらっていないお年玉をせしめようと、ノリスケがやってくるのを見込んでカツオがしかけた企みにノリスケがまんまとひっかかる場所である。第1の発話は、字義的には「お年玉の整理をしている」という事態の有様をノリスケに報告しているかたちになっているが、その報告の裏では、非字義的に「ノリスケさんからのお年玉はこの中には無い」という事実をノリスケに突きつけている。そして、「まだノリスケさんからはもらってないよ、だから、くれるのを期待しているよ」と「いやみっぽく」せびっているのである。従って、続いての第2の発話は、口では「無理をしなくてもよい」と遠慮をしているように見せかけているが、それはあくまでも字義的な意味であり、実は、非字義的にはその正反対で、「せびり」の効力をより高める働きをしているのである。カツオのこれらの一連の発話は、字義的には遠慮をしているように、表向きには「控えめな」発話を遂行しながら、非字義的には遠慮どころかより強い要求を行っているのである。このことはグライスの会話の公準の観点で見ると、「会話に

においては必要かつ十分な情報を相手に与えよ」という**量の公準の逆用**ということになる。つまり、遠慮のような控えめな発話を遂行することは、それが必要とされないミウチの関係の文脈においては、量の公準を何がしか別の意図のためにわざわざ破っていると解釈できる。ちなみに、このカツオの行為は、「せびり」であって「ねだり」ではない、なぜならば、ノリスケにはこの場面ではカツオの要求に対する拒否権はないからである<sup>4)</sup>。従って、このような事例は、作業仮説1への反証ではない。

次例も、一見ミウチの間での「遠慮」のように思われる。しかし、この例も(8)と同様「遠慮」ではない。

(9) マスオ：なにがほしい？ ボーナス出たらかってあげるよ

カツオ：そうねえ……ぼくケシゴム

ワカメ：あたしふうせんガム

マスオ：みくびるな もっとでるぞっ!! [Hasegawa 8 : 108]

この引用部分の登場人物は義兄のマスオと義弟のカツオと義妹のワカメである。この場面はボーナス前に、マスオがカツオとワカメに「ボーナスが出たら欲しいものを買ってやるぞ」と兄らしいところを見せようと恰好を付けたのに対して、普段の義兄の生活を知り尽くしている弟たちが、義兄の懐具合を勘案して、極めて控えめな要求をしているのである。この「遠慮」の言語行為は、字義的に断りの表現を用いて遠慮するのではなく、相手からの申し出を受け入れてはいるものの、ほぼ断っているにも等しい受け入れの表現を用いた「間接的遠慮」である<sup>5)</sup>。彼らは、極めて仲のいいミウチの関係にあるから、直接的遠慮をしないことが義務であるから、さらに、遠慮度を上げる間接的遠慮を遂

4) 「ねだり」と「せがみ」の違いについては、久保、他(2002 : 115-117)を参照されたい。

行することは、「二重の遠慮」の遂行を意味する。悪童のカツオと彼の行動をお手本とする妹のワカメは、わざわざそのような二重の遠慮の言語行為を遂行することによって、人のいい義兄を「からかっている」のである。つまり、この言語行為の第一義的発語内行為は「遠慮」ではなく「からかい」ということになる。しかし、同時に、この不必要な二重の遠慮の言語行為の遂行は、発語媒介効果として、二人の発話者の意図とは無関係に、聴き手の心に「からかいに負けてたまるか」という競争心を生み出す。そして、マスオに「みくびるなもっとでるぞ」と言わしめるのである。結果的に、義弟と義妹にとって、その発話は「願ったり」である。従って、この事例も作業仮説1への反例ではない。

以上の例が示唆することは、ミウチ関係にある対話者の発話が、字義的に「遠慮」の発語内行為である場合、はたして、非字義的にも「遠慮」をその発語内行為として遂行されているのかどうか検討する必要があるということである。そして、もし、その発話の非字義的発語内行為が「遠慮」ではなく、かつ、その発話の第一義的発語内行為であるならば、そのような発話の事例は、必要十分条件1に対する反例ではないということである。

#### 4. 1. 2 ヨソサマ関係にある談話参与者間で「遠慮」が遂行されないことがあるか？

次例は、本来「遠慮」を必要とするヨソサマ関係にある談話者間で、「遠慮」が遂行されていないように見える事例である。

---

5) 相手からの申し出の内容をそのまま受け入れるのではなく、その内容の程度を下げた受け入れることによって、遠慮の気持ちを相手に伝えるという戦略は、ヨソサマ関係にある談話者の談話において通常に見かけることである。例えば、近所の主婦から、「もらいものなのよ、おすそ分け」と果物などの頂きモノを持ってこられたとき、「こんなには頂けません。半分だけ」といって相手の好意を半分だけ受け取ることで厚かましくならないようにと言う配慮をする。

- (10) 「僕は在り難いと思ってる。僕はお義母さんが好きだ。ひとり暮らしが長かったから、こういう家庭に憧れていた。父親がいて、母親がいて、姉妹がいて…」

(中略)

「ただお世話になるのはあまりにも図々しいし……男として不甲斐ないことだと思って」

「そんなこと言わないの。こちらでお願いしてるんだから……」

「じゃ、遠慮なくお世話になります」 [橋田1：223-224]

引用部のこの対話は、次の日曜に結婚することになっている洋次とその相手の葉子の母親節子との対話である。従って、両者はまだ他人同士、すなわちヨソサマの関係にある。この対話の場面は、まだ二人が住む家は決まっていない洋次と葉子が、葉子の両親に式の準備や式後の住まいについての報告に来た際、子供たちがほとんど他家にとついで寂しい思いをしている節子から、自分たちとの同居を言い出される。最初は、遠慮がちであるが、根っから計算高い洋次は節子の申し出を喜んで受け入れる。この場合、洋次の「受け入れ」のせりふを引き出したのは、先行の「そんなこと言わないの。こちらでお願いしてるんだから」という「遠慮しない」ことを洋次に求める節子の発話である。この発話は、洋次との間の「ヨソサマ」関係を取り消し、「ミウチ」扱いを認めるという発語媒介効果を持つ。換言すれば、洋次は、「娘と結婚する男」という立場から、「娘婿として同じ屋根の下で生活共同体の一員になることが決まった男」へ昇格したのである。傍目には、洋次の発話は遠慮がない、ヨソサマ関係の制約を破る厚かましい発話に写るが、対話の当事者である節子には、望むところで、厚かましくはないのである。従って、この事例は仮説2への反証ではない。

この事例は、本来、ヨソサマ関係にある談話者から構成される談話において、そのような横の人間関係の解消とそれに伴うミウチ関係の形成が、ヨソサマ関

係を解消できる立場のものから提案され、それが相手方に受け入れられたならば、ヨソサマ関係が解消される、ことを示唆している。そこで、このような、横の関係の移行を、(11)のように定義し、「ヨソサマ関係からミウチ関係への昇格」と命名しておこう。

(11) 「ヨソサマ関係からミウチ関係への昇格」

定義：談話参加者の人間関係が、ヨソサマ関係からミウチ関係に昇格するということは、ヨソサマ関係の解消とそれに伴うミウチ関係の形成を提案できる立場の側から提案され、かつ、その提案が相手方に受け入れられるということと同等である。

#### 4. 1. 3 ヨソモノ関係にある談話参加者間で「遠慮」は遂行されないのか？

次例は、本来「遠慮」という行為そのものが無関係のヨソモノ関係にある談話者間で、「遠慮」が遂行されているように見える事例である。

次の引用例の文脈は以下の通りである。それまで警察官でない浅見は、「どこの馬の骨ともわからない部外者が捜査に首を突っ込むなど」、捜査に関わることを嫌われ・疎まれ、ヨソモノとして扱いを受けてきた。しかし、警察庁刑事部長の弟という浅見の素性を知った警察は、浅見に対して「捜査会議で推理を聞きたい」と、手の平を返すように、打って変わった申し出をしてきたのである。これは、浅見がヨソモノからヨソサマに昇格したことを示している。浅見は、そのような急激な変化に戸惑い、その申し出を断っている。その戸惑い、あるいは、躊躇を「遠慮」と捜査官は解釈している。従って、この事例は仮説3への反証ではない。

(12) 「(前略) 合同の捜査会議を開き、浅見さんの推理をお聞きしようということになりました」

「ちょ、ちょっと待ってください」(中略)

「民間人の僕が、専門家である警察のみなさんの、それも合同捜査会議なんかで話すことなんかできませんよ」

「いやいや、ご遠慮なさるというお気持ちもよう理解できます。(後略)」

[内田，御堂筋，229]

ところで，ヨソモノ関係にあると言うのは本来両者の間に意思伝達のチャンネルが存在しないということと同等である。従って，ヨソモノ関係にあるモノの間では，そもそも談話を構成しない。従って，彼らの間に，何がしかの意思伝達のチャンネルが開かれるならば，彼らはもはや互いにヨソモノではなくヨソサマの関係に入る。その状態の移行は，どちらか一方が他方に意思伝達の意思を示し，相手がそれを受け入れて初めて可能になる。その代表的なものは，**隣人への仲間入り**の事例であろう。多くの最初の切り出しの発話は，相手に対して与える可能性のある負担に対する配慮の言葉である，「あのう，すみません」のような**躊躇のマーカ**ーで始まっている。「お近づきの印に」「はじめまして」なども**仲間入りのマーカ**ーである。それに対して，無視ではなく，受け入れ権限を持つ相手からなんらかの受け入れのメッセージがあって初めて，ヨソモノからヨソサマの関係への移行が可能になるのである。

次の引用部は，躊躇のマーカで始まっており，初対面の相手に何かを尋ねるために人間関係のチャンネルを構築しようとする戦略が用いられている。この躊躇の発話者は，自称森崎という女性で，最近近所に引っ越してきたばかりで町内の決め事に不案内であるという「**触れ込み**」である。不案内であるから教えてほしいのように振る舞い，対人関係に無防備な弥生に，「何かわからなかったら，どうぞご遠慮なく」というお決まりの受け入れ文句を言わせている。この最後の台詞で，両者は，「知り合い」になってしまうのである。従って，この事例も作業仮説3への反例ではない。

(13) 「あのう，すみません」

顔を上げると、女は、あら、というように弥生の顔に見入った。その目には、ただ純粋な賛嘆がある。(中略)

「そうですか、うちは路地の奥の山本です。何かわからないことがあったら、どうぞご遠慮なく」 [桐野, OUT (下), 71-72]

ただし、「どうぞご遠慮なく」という台詞は、文字通りに「遠慮の義務」から相手を解放することを意図した発話ではない。あくまでも、リップサービスであり、それなりの隣人としてのマナーは暗黙裡に要請しているのである。換言すれば、この台詞は、ヨソモノ同士の関係からヨソサマ関係への移行を可能にするための、**関係解消マーカー**である。

接客業における客との関係も同様である。例えば、例(14)の談話は、「あついね～」という**仲間入りのマーカー**で始まり、それに対する**相槌**の台詞「あついですね～」がヨソサマ関係の構築を保障している。客が暑さに閉口して、途中店に立ち寄って冷たい飲み物を飲みたいと思うのだが、自分ひとりが喉を潤すのは気がひけるので、運転手にも飲み物をすすめている。それに対して、運転手は「おかまいなく」と遠慮している。このタクシーの運転手と客の关系的に、サービス提供者と客がそのサービス提供の場で空間を介して利害を共有した場合、「**馴染み**」「**常連**」でなくとも親しげな言葉を掛け合う。それは、あくまでも提供するサービスの関わりに限ったその場かぎりのものであるから、あくまでもリップサービスの域を越えていない場合もあるが、ヨソモノ関係からヨソサマ関係への移行がなされている。従って、この事例も作業仮説3への反例ではない。

- (14) 客 : あついね～  
 運転手: あついですね～  
 客 : うんてん手くんもーぱいどう？  
 運転手: ほんとにおかまいなく

客 : まあそうえんりょしないでさ!!

運転手 : ほんとおかまいなく

[Hasegawa 6 : 77]

以上の観察に基づいて、ヨソモノ関係にあるもの同士が、ヨソサマ関係に移行する条件を定義しておく。

(15) 「ヨソモノ関係からヨソサマ関係への昇格」

定義：談話参加者の人間関係が、ヨソモノ関係からヨソサマ関係に昇格するということは、ヨソモノ関係にある者の間に利害関係が発生し、ヨソモノ関係の解消とそれに伴うヨソサマ関係の形成を、どちらかが提案し、かつ、その提案が相手方に受け入れられるということと同等である。

## 4. 2 必要十分条件5の妥当性

### 4. 2. 1 配慮とは

必要十分条件5では、それぞれ、「遠慮」の発語内行為の遂行においては、「発話者は相手に対する配慮の気持ちが相手に伝わることを願っている」と定めている。しかし、相手に対する配慮の本質は何処にあるのであろうか。

次の2つの事例を観察されたい。

(16) 小父さん : すくないが お中元だ

カツオ : とんでもない うちでしかられますから

小父さん : まあ そういわずにとっておきたまえ

カツオ : ではともかく おあずかりして

[Hasegawa 7 : 157]

(17) 小母さん : ねえ おあがんさいよ。[子供たちにお菓子を勧めている]

カツオ : いいですよ

小母さん：ねえ じゃ もっておかえんなさいよ

カツオ : いいです

[Hasegawa 3 : 122]

これらの、引用例は、親の言いつけでお使いに近所の小父さん、小母さん宅にやってきた小学校高学年の男児、カツオが、品物やお菓子を勧められて、「遠慮」している場面である。年少の子供は、(遠慮が義務的という) ヨソサマ関係における制約を必ずしも求められるわけではなく、子供だからという理由で「甘え」が許されるが、サザエさんに登場する子供たちは「ソト面がよく」、あえて「親の顔を立てる」ために親の言葉(「躰け」)に従って、その制約を守っている。このような配慮のあり方は、決してサザエさんに登場する子供たちに限ったことではない。一般に、「遠慮」における、「配慮」は、相手に対する配慮であると同時に、相手から厚かましい無遠慮な人間だと思われたくない、あるいは、「ミウチの顔を潰さない」為の自身やミウチに対する配慮でもある。

従って、現代言語行為論における「遠慮」の必要十分条件は、「配慮」の向けられている相手に関して、さらに検討を加える必要がある。

#### 4. 2. 2 「配慮」は相手への配慮が自分への配慮に勝るのか？

「配慮」については、相手への配慮が自身への配慮に勝るか、両者に同程度の配慮がなされるか、自身への配慮が相手への配慮に勝るかが問題になる。

まず、例(18)を見てみよう。この事例は、字義的には話し手自身への配慮が相手への配慮に優先するよう見えるが、非字義的にはそのような自身への配慮は皆無のケースである。この事例の二人の対話者は、黒木検事と国家プロジェクトの研究者であり、互いにヨソサマの関係にある。黒木は、相手の申し出に対して、「止めておきます」、「止します」と応える代わりに、相手に配慮して丁寧に「遠慮します」と言っている。そして、「遠慮」の発語内行為に先行して、「まだ死にたくないんで」という自身への配慮を字義的に明言する台詞をその理由として付け加えている。しかし、彼は世界中から恐れられる無敵の戦

士であり、訓練機の操縦など恐れるわけではない。あくまでも、この理由付けは「冗談」に過ぎないのである。従って、この「遠慮」の場合は、自身への配慮はない。

(18) 「でも、あなたは、もしやパイロットの免許をお持ちなのではありませんか」

「双発は、飛ばせます」

「やはりそうでしたか。計器類を眺める目つきが、素人のかたととはどことなく違うと思いました。双発を飛ばせるなら、訓練次第ではFT01を操縦できますよ」

「まだ死にたくないんで、遠慮しておきます」黒木は、珍しく冗談を言って、座席から腰を上げた。 [門田2：57]

次の(19)の例は、何れも**相手への配慮が自身への配慮に勝るのか否か判別が難しい場合である**。次の事例は、ビール瓶に残った最後の一杯を、どちらが飲むかで、年齢差のある二人の会社員が譲り合っている場面の対話である。よく見かける場面で、「もう飲めません」という台詞が、本心なのか相手への遠慮から出た台詞なのか見分けにくい。本心は本人のみぞ知るというケースで、たとえ自分のグラスを手で覆ってビールが注がれないようもとめるしぐさで「かんべんして下さい」という台詞を言っても、本心はわからない<sup>6)</sup>。「タテマエ」と「ホンネ」の識別が困難なケースである。「実は、肝臓を傷めてまして。申し訳ありません。」のような究極の台詞が出ない限り、「お酒の世界」での台詞の真意はつかめないのである。

---

6) この「かんべんして下さい」という発話は、字義的には発話者自身が自分の身体に配慮して、「これ以上ビールを飲まなくてもよいという許し」を相手に求めた発話であると解釈される。

- (19) 年長の社員：サ のこりは あけてください〔ビールを勧めている〕  
 年下の社員：いえ もうだめです ほんとに  
 年長の社員：君のような若い人がいくじのない！  
 年下の社員：いえ かんべんして下さい〔自分のグラスを手のひらでお  
 おっている〕  
 年長の社員：いやボクはだめ こんなに赤くなっちゃって  
 年下の社員：マアマア いいでしょう おあけなさい

[Hasegawa 2 : 144]

以下の、(20)、(21)は、明確に自身への配慮が優先している場合である。

次の事例の二人の対話者は刎頸の友であり、国家の命運を背負う運命共同体的関係にある。その意味では両者はミウチ同然であり、私的には本来遠慮の必要はない。しかし、海堂は総理大臣、倉脇は外務大臣という公的立場にあり、倉脇はその関係に対する「わきまえ」から、距離を置き「配慮」がなされている。この場合、「遠慮させてください」は字義的には「遠慮」であるが、非字義的な第一義的発語内行為は、「断り」である。倉脇は、間接的発話行為を遂行して、相手からの誘いを「お断り」しているのである。そして、この「断り」は自身への配慮が優先しているケースである。

- (20) 「帰らないのかね」海堂が、倉脇に声をかけた。  
 「ええ、もう暫く此处で……」  
 「あまり考えこまぬことだ。黒木君に任せておきたまえ」  
 「それはそうですが……」  
 「今夜、赤坂あたりで体を休めないか。私がおちそうする」  
 「いや、今日は遠慮させて下さい」 [門田 1 : 126]

最後の事例は、お盆の法要で、読経が終わった後、「お口汚しに」と檀家の

舟さんが、和尚にスイカを勧めている場面である。舟たちの勧めを和尚はしきりに遠慮している。その遠慮は、昨年の法要の際に出されたビールを期待してのことである。発話の流れの中で始めて、それまで檀家の婦人に配慮した「遠慮」に見えていた和尚の発語内行為が、実は、ビールを当てにした自身への配慮に基づく「遠慮」であることがわかる。引用の原典では、この結末は、接待をしている舟たちが、「去年はビールをお出ししたんだった。」と自身の不手際と不配慮を恥じるという発語媒介効果を生むことになっている。一方、この作品の読み手から見ると、和尚は「遠慮が無く、厚かましい」ということになる。このように、対話においては、発話者の「遠慮」の真の意図は、その「遠慮」の発語内行為自体の遂行の時点では相手に正しく伝わらない場合がある。

- (2) 舟　　：どうぞおひとつ〔和尚にスイカを勧めている〕  
和尚　：めっそうな、どうかおかまいなく  
舟　　：まアそう　おっしゃらず  
和尚　：とんでもない  
サザエ：どうぞどうぞ  
和尚　：せっかくですが　ビールがまずくなりますんで

[Hasegawa 9 : 90]

## 5. 当座のまとめ

本稿では、発話者自身の「分」に対する「わきまえ」を前提とする日本の社会構造にミウチーヨソサマーヨソモノからなる横の人間関係が存在することを想定し、その想定の中で、日本語の「遠慮」の言語行為に関する3つの作業仮説を設定した。その上で、現在言語行為論の枠組みの中で「遠慮」の必要十分条件を想定し、それ等の内、必要十分条件1と必要十分条件5についてその妥当性について検証を試みた。必要十分条件1は、「遠慮」の発語内行為の発語内目的の達成の様式の1つである発話者と相手の横の人間関係についての規定

であり、本稿では「遠慮」が遂行されるのは、両者が互いに「ヨソサマ」の関係にある場合に限ると規定している。そして、それに対する反例と見られるもののタイプは、字義性による識別によって説明され、反例でないことが示された。その妥当性を証明することは、同時に、3つの作業仮説の妥当性を証明することにもなっている。しかし、本稿で取り上げることができた反例のタイプ以外のものが発見された場合、それに対する説明が求められることは言うまでもない。必要十分条件5は「遠慮」における「配慮」が誰に向かうのかについて規定したものである。本稿では、「遠慮」においては、「配慮」は発話者自身ではなく、相手に対してなされると規定している。多くの場合は、この規定を満足することがしめされたが、「遠慮」の行為の遂行に際して、発話者の「タテマエ」と「ホンネ」の識別が困難な場合があり、その場合、字義的には相手への配慮がなされているが、非字義的にはつまりホンネでは自身への配慮がなされている、と解釈できる場合もある。従って、「遠慮」の必要十分条件5については、その妥当性は十分に検証されたとは考えていない。「遠慮」と「辞退」「断り」といった意味的類似性のある諸行為の間の意味関係もさらに掘り下げる必要もあろう。このあたりについては、さらに検討を加える必要があると思われるので、継続の課題としたい。

#### 参 考 文 献

- 生田少子 (1977) 「ポライトネスの理論」『言語』26(6): 66-71。
- 井出祥子, 他 (1986) 『日本人とアメリカ人の敬語行動』南雲堂。
- 井出祥子 (1992) 「日本人のウチ・ソト認知とわかまへの言語使用」『言語』vol. 21. no. 12. 大修館。
- 井出祥子, 彭 国躍 (1994) 「敬語表現のタイポロジー」『言語』vol. 23. no. 9. 大修館。
- 賀川洋 (1997) 『誤解される日本人』講談社。
- 久保進 (編) (2002) 『発語内行為の意味ネットワーク』晃洋書房。
- 土居健郎 (1971) 『「甘え」の構造』弘文堂。
- 土居健郎 (1975) 『「甘え」雑考』弘文堂。
- 土居健郎 (1985) 『表と裏』弘文堂。

- 中根千枝 (1967) 『タテ社会の人間関係 単一社会の理論』講談社。
- Brown, P. and S. Levinson (1978, 1987) *Politeness*. Cambridge : Cambridge Univ. Press.
- Davis, S. (1979) Perlocutions. In J. R. Searle, F. Kiefer, and M. Bierwisch (eds.) *Speech Act Theory and Pragmatics*, 37–55. Holland : Reidel.
- Fogel, Alan (1993) *Developing Through Relationships—Origins of Communication, Self, and Culture*, Chicago : The University of Chicago Press.
- Ide, S. and M. Yoshida (1999, 2002) Sociolinguistics : Honorifics and Gender Differences. In N. Tsujimura (ed.) *The Handbook of Japanese Linguistics*, 444–480. Oxford : Blackwell.
- Kubo, Susumu (2002a) ‘if you don’t mind’ as a Regulation Act Marker. *The Rising Generation* 3. Tokyo : Kenkyusha.
- Kubo, Susumu (2002b) An Invitation to Speech Act Theory : a reply to critical comments from Relevance Theory. *Studies in Pragmatics* 4. Pragmatics Society of Japan.
- Kubo, Susumu (2003) Directions of Regulation in Speech Act Theory. In Turner, Ken and Jaszczolt, K. M. (eds.) *Meaning Through Language Contrast : Cambridge Papers*. Amsterdam /Philadelphia : John Benjamins.
- Kubo, Susumu (2004) An Invitation to Regulation-augmented Speech Act Theory. In *Proceeding from JACET Summer Seminar at Kusatsu*, JACET.
- Spencer-Oatey, Helen (2000) *Culturally Speaking—Managing Rapport through Talk across Cultures*, London and New York : Continuum.
- Usami, Mayumi (2002) *Discourse Politeness in Japanese Conversation*. Tokyo : Hitsuji.
- Vanderveken, Daniel (1990) *Meaning and Speech Acts*. Cambridge : Cambridge Univ. Press.
- Vanderveken, Daniel (1994) *Principles of Speech Act Theory* [*Cahiers d’Épistémologie*, 9402]. Montréal : Université du Québec à Montréal.
- Vanderveken, Daniel (1999) *Illocutionary Logic and Discourse Typology* [*Cahiers d’Épistémologie*, 9912]. Montréal : Université du Québec à Montréal.
- Vanderveken, D. and S. Kubo (eds.) (2002) *Essays in Speech Act Theory*. Amsterdam /Philadelphia : John Benjamins.

#### 引用資料

- [門田 1] 門田泰明『狙撃』角川書店, 1983。
- [門田 2] 門田泰明『帝王コブラ』光文社, 1985。
- [桐野 1] 桐野夏生『OUT 上』講談社, 2002。
- [橋田 1] 橋田壽賀子『渡る世間は鬼ばかり 1』集英社, 1996。
- [Hasegawa 1], [Hasegawa 4]～[Hasegawa12] Hasegawa, Machiko. *The Wonderful World of Sazae-san 1, 4～12* (translated by Young, J. and Young, D.). Kodansha International, 1997.

- [Hasegawa 2] & [Hasegawa 3] Hasegawa, Machiko. *The Wonderful World of Sazae-san 2 & 3* (translated by Young, J.). Kodansha International, 1997.

#### インターネットホームページ

- 豊明市立沓掛中学校ホームページ「校長室の窓」（発行 沓掛中学校校長 平成14年10月1日）第32号。（<http://www.kutsukake-j.aichi-c.ed.jp/mado/mado32.htm>）
- 国際ロータリー第2570地区第4グループ 本庄南ロータリークラブホームページ「会報」（発行 平成14年5月28日）（<http://www/honjo.ne.jp/kp/rotary/>）

（付録）本稿に登場した人間関係を表す言葉

〈あ〉

相槌

厚かましい：「厚かましい！」

甘く見る：「甘く見られる。」

有難迷惑

行きつけの店（➡なじみ）

いやみ

ウチ

遠慮：遠慮がある／ない

「少しは遠慮しろ！」「少しは遠慮ということを考えろ！」「少しも遠慮しない！」「遠慮ということを知らないのか！」

二重の遠慮

おすそ分け

〈か〉

顔（＝体面，名誉）

顔を立てる：「親の顔を立てる。」

顔をつぶす：「ミウチの顔を潰さない。」

顔なじみ

からかい

関係解消マーカー：「どうぞご遠慮なく」

儀礼

気心の知れた（仲／間柄）（cf. 気のおけない仲）

社交上の儀礼

断り

〈さ〉

座

座を外す／外させる

座に残るもの／から外れるもの

上座（かみざ）（⇒高いところ）

下座（しもざ）

辞退する

躰け

常連

知り合い

席

自分に過ぎた席

床の間を背にする席（cf. アラタマツタ席）

世間

世間様：「世間様（ヨソ様）に顔向けできない。」「世間様に恥ずかしい。」

世間体（せけんてい）：「世間体が悪い。」

せしめる

せびり／せびる

ソト

ソト面：「ソト面がいい。」

〈た〉

体面：体面を傷つける

高いところ（⇒上座）

タテマエ

他人

他人行儀：「他人行儀な！」

旅の恥はかき捨て

躊躇

躊躇のマーカ－：「あのう、 すいません」

つけ上がる：「つけ上がらせる。」

慎み：「慎みがない。」

床の間（⇒席）

どこの馬の骨ともわからない者

隣近所

〈な〉

仲間 (⇒ミウチ)

仲間入り

仲間入りのマーカー：「お近づきの印に」「はじめまして」

馴染み (⇒顔なじみ) (⇒顔, 行きつけ)

ねだり／ねだる

〈は〉

場

場をわかまえる (⇒わかまえ)

配慮

相手への配慮

身内への配慮

恥：「恥を知らない。」「恥を知れ。」

控えめ

触れ込み

分 (ぶん)

分に過ぎる

分をわかまえる (⇒わかまえ)

ホンネ

〈ま〉

ミウチ (身内)：「身内の中で遠慮するなんて水臭い。」

ミウチ扱い

見くびる

面識：面識のある／ない

〈や〉

横の人間関係

ヨソ

ヨソサマ (よそ様) (⇒世間様)

ヨソサマ関係からミウチ関係への移行／昇格

ヨソモノ (余所者, ヨソ者)

ヨソ者扱い

ヨソモノ関係からヨソサマ関係への移行／昇格

〈ら〉

埒外

リップサービス

礼儀：「親しき仲にも礼儀あり。」

〈わ〉

わきまえ

場をわきまえる (⇒場)

分をわきまえる (⇒分)